



多林蘇岐

目次

▲研究

林政上の諸問題
樽送り事業

▲文苑

丸山君に
日記の中より
遠足記
春雨の後
入學後一週の感
寄宿舎邊の夕
和歌、俳句

▲雑報

片々

（日四十月六年四十四治明）（日五廿月每定） 號九拾七第 日五十二月五年五正大

研究

林政上の諸問題

本稿は前便申譯の通り其の機会に臨んで起る考案の出
鱈目であるから其御積りて御笑覽を願ひます

間瀬濱にて 宇 紫 生

二、漁村と林業

○今私は越後の礎神彌彦山の背景たる浦濱の勝地間瀬村の海濱眺瀾亭といふ一旅宿の一室に早春の海の色を見詰めて居ります
○頽廢した村有林が屏風の如くそよよ立つ前に立つて今日私は村民を集めて林業の講釋をしました、而して尙漁業との關連せる問題の幾つをも尙又風光上に及ぼす林業の關係の幾事項をも付加しました、彼等にプランクトンの話をするのは或は妥當でないかも知れませんが然し全村の殆んど八割が漁業によつて生活する直接の關係からして彼等は夫に注意をせずには濟まされないのであります、而して又年々入込むで来る避暑客と漫遊客の恩恵に浴する彼等は風光の維持と恢復に就て一考をも加へない譯には行かないのであります

○白沙磯汀の彼方には礁岩の奇形に突出した其上に老松の颯々たる風韻を傳へて來るのであります、榭の粗林が寄する潮の汀に其の鮮明な如何にも生色のくつきりした色と形とを表現するのを見る遊客は如何に快

感と與へらるゝ事でしょう

○糺糊として佐渡が直ぐに浮出て居ます彼の城山が島國の一角をなして突出する灣には小木といふある情緒に充ちた町を形成して居るのであります

七宮先生の述懐をお聞きになる迄もありませぬ、小木の風光は其の黒い禁伐制度による樹林の城山に生命を保つのであります、漁火幾つ明滅する灣の彼方池の面より靜かな漣波の上に浮ばせた小舟は皓々たる明月の下に讚嘆詞が幾度か繰返されずには濟まないであります、如何しても其處に傳奇的の詩趣がなくては止まないであります

○海岸の風光は婉曲美に、樹と樹林の配置に左右せらるるのであります、實利的に奔り易い近時の漁村は彼等自身の爲に將又將來の繁榮を確保する爲に根本に於て森林の調和を計る必要があるのであります

○漁村改良漁業振興の聲が有識間に喧傳せられて農村の夫れと共に彌々其の實際の施設を見んとするのは喜ぶべき現象に相違ないのであります、後者に比する其の聲は極めて微少で漁村の幾人が本問題を眞面目に考へて居りませう

○鴨の幾萬が海を黒くする迄に海上に浮遊しやうと改良機關装置の漁船が數哩の沖に漁業をしやうと沿岸の漁民は何千年來の爲し來り、を其の儘です沿岸漁業が沖合漁業に

變り帆船が石油發動機船に換つても何處を風の吹く位に思つて居るので

然しながら人の爲に縣國の爲に計るべく盡すべき吾人はさう單純に看過し得ない問題であるのであります

○海岸線の長い本邦としては林業家も亦此方面に充分なる研究と企劃を欠くことが出来な

○一ヶ年百五拾圓が最上位の域に於て年々炭焼夫の増加する趨勢からして彼等にも今少し其改善と更に他の補助等を與へなければ

○私は今夕陽を浴びながら脚下に入り来る漁船の幾つかを見ます、蝦と蟹とを満載した

○上野に開かれて居る海の博覧會が隆んなるを見るほど吾人は其裏面の悠うした傾向と趨勢を其頭の中に歸納して適當の施設を

て其頭腦の退歩したのではないかと思ふ人さへもありません。最初高級に一飛に出る種類の

り且又土地利用に錯誤を來しつゝある大多数の農民の憫むべき立場から考察して彼等の將來を確保し得るに近い方案を指導し且又實施せしむるには林業上輕視すべからざる

松山温泉の宿舎の湯槽に身を横たへ乍ら春風に戦く松の枝を見海の音の高鳴を聞いてうつらうつらして居ます如何にも吞氣さうに思はれるが此の氣分も只半日の間で

桴送事業

小池溪舟生

私は客年來木曾川下流に桴送と稱する仕事に短期間有り付いたので該事業の概況を林友諸兄に知らせんと思ひ不文ながら有の儘を御知らせ致す次第にて若し聊にても他山の石として御参考にもなる様な事があれば誠に望外の榮と致す處であります

一、機關、機關としては次の如きものが設けてあります
錦織出張所(錦織網場と稱すれ共其は舊稱也)(岐阜縣可兒郡錦津村大字錦織所在)
笠松桴送事業所(桴送期間中存置す)
犬山派出所(同)
(愛知縣丹羽郡犬山町所在)

兩國派出所 (同)
(同縣海部郡鍋田村大字加稻山新田)
千年派出所 (同)

(名古屋市南區千年所在)
白鳥貯木場 (貯木場にして一定の設備あり)
(名古屋市南區熱田西町)
桑名貯木場 (同)

(三重縣三重郡桑名町所在)
白鳥、桑名貯木場は貯材及公賣に關する業務を執り梓送りとしては單に受梓に過ぎざる故何れ又稿を更めてお知らせ致します

笠松已下各派出所は該期間中は必要なる人員として
笠松事業所 三名、四名
犬山派出所 一名、二名
兩國派出所 一名
千年派出所 同

を派遣して事業に執掌するのです而して事業所及派出所直屬の工夫として在記名稱の工夫を役使して居ります
梓夫總頭、梓夫總頭格、梓夫頭
にして木會官行伐木の日備總頭、同總頭格、同代人、同代人格といふやうな役目の者として其成立、待遇の上から申ても大同小異であります
此外臨時の備役工夫として梓繫留工夫梓取調工夫、夜警工夫、雜役夫等があります、此等の労働者の指揮監督の關

係を圖示すれば次の様であります
事業所 梓夫總頭 梓夫總頭格 梓夫頭
梓繫留工夫
梓取調工夫
夜警工夫
乘下工夫頭 總代 乘下工夫
又事業所及派出所の直屬工夫の配置は次の様であります

笠松事業所
梓夫總頭 一名
梓夫頭 三名
梓繫留工夫 二名
夜警工夫 三名
犬山派出所
梓夫總頭格 一名
梓夫頭 二〇
梓繫留工夫 二名
兩國派出所
梓夫頭 一名
梓繫留工夫 一名

千年派出所
梓夫頭 一名
梓繫留工夫 一名
掛員一名
梓取調工夫 二名
夜警工夫 一名

此等の工夫は各所總頭の命より指揮するものにして場所により總頭、總頭格を缺く事もあります
錦織は梓の掻立及乗下げをなす労働者の組織等は凡て梓送りと同であります
二、事業

くるものにして此の間五里、風雪の日も何等厭ふ事なく回漕の任に服するものなり

ハ、材團編成、笠松に至れば乗下方法全く異なり一材團(或は一小屋とも稱す)を編成し回漕するものにして其の材料として

續棒、長さ十五尺、經三寸餘の圓錐狀の槍棒にして鐵線の末端を之れに結び付け停止、方向轉換の用をなすもの所謂棍の代用となるものなり、以前此の棒を使用せざる時は一人にて僅かに二、三枚を回漕せるに漸くにして數年前本棒を使用する法案出され回漕者に多大の利便を與ふる様になれり

鐵線、八番線三筋を繩狀にし梓(十枚繼合せしもの二團十四枚繼合せしもの二團各之れを「モヤイ」と稱す)先端下部より後部中央に張り前記の續棒に結束し梓の破損及停止及方向轉換の補助をなすものなり

濱綱 藁製にして長さ十二間經五分一材團に二十四筋を貸與し各一モヤイ周圍に張廻し梓の接目より分離を防ぎ亦破損を少なからしむ旗章、御用材と記せる赤白の旗にして河海通航中一見御用材なる事を

知り得るものにして民材との見誤りを無からしむるものなり竹棹長さ十三間位のものにして海上航行中に専ら用ひらるるものなり
帆、航行を早からしむるに用ゆ
右の材料を以て白鳥に回漕の分は四十八枚桑名は六拾四枚の梓を乗下ぐるものなり

編成されし材團は兩國(木會川河口)に到り木數の過不足其他檢閲を受けて天候及海上の風波の工合を見定めて始めて海航し名古屋港より千年に到り千年派出所の手に渡され其れより白鳥貯木場に送り込まれるものにして此の海航こそ極めて肝要にて亦危険多く一朝天候其他を見誤るときは、激濤に渦巻かれ梓は壊破流散し知多半島西海岸より伊勢島羽太平洋に流出し多大の損害を蒙る事少なからず
二、日數、梓が掻立てられてより千年に着する迄の日數大抵一週間内外にして錦織より犬山迄一日、犬山より笠松迄一日笠松より兩國迄三日兩國より千年迄二日の割合にして桑名貯木場に至るものは、笠松より二日とす然れども前記の如く天候其他の爲めに延引せらるるもの多し
ホ、里程、里程は錦織より犬山迄六里犬山より笠松迄五里、笠松より兩國迄十里、兩國より千年へ四里にて二十五里

内外とす日數と里數とは流速の多寡に反比例するものなり
三、經費、網場より白鳥貯木場に至る間の梓送と稱する部の經費は概略次の通りなり(但し一石當り)
一金十五錢 錦織より白鳥貯木場迄
一金九錢 網場より犬山迄
一金六錢 犬山より白鳥迄
網場より犬山迄の經費多額なるは網場に於て梓掻立の爲め材料及工夫等を要するが故なり而して上記の單價は直接費のみにて間接費たる流材及風水害防備の經費は含有せざるものとす
以上掲げし如く幾多の手續と日數を費して市場に賣捌かるに至るものにして斯くては、市場の多需に應ずる事且つ副産物の利用絕對に不可能なれば汽車輸送森林鐵道等の計劃を立て目下着々進行中にて一方梓送も笠松附近の木會川沿岸より鐵道に依り輸送さるゝ計劃も有る様子にて時勢の然らしむるものか改善に改善を重ねつゝあり(完)

林業家として渡鮮
せんとする諸君に (五)

朝鮮に於ける林業の前途は有望であることは既に僕の口癖の様であるが本年度の本校の卒業生の中から四五人も渡鮮して林業に従事せられると云ふ事であるけれども先方から

ハ、梓の掻立、之れは錦織網場に於て行はるる仕事にして第一に材料として藤蔓、檜會木、梶枕、手板にて長二間(十五尺)に繼幅壹丈にして材積三十乃至三十五石のものを熟練せる工夫が急の内に編組するので之を終れば吏員監督の下に檢尺をなし樹種、末徑、長さを測り之れが本數を調査し手板と稱する木札に番號と共に記載して梓に附着し之れを一種の送りとし發送地及發送先を記入し置くのであります
ロ、回漕、其の回漕をなすや梓は一乗毎に船隻二人の回漕夫に依り未明網場を出發し河程六里餘の激流奔湍白波身を滾ぶの難場數ヶ所を左折右回見事に操縦し第一繼立所たる犬山派出所に到り檢閲(主に木數の過不足及破損の程度)を受け其の任を終へ船隻、四貫目餘のものを肩にして歸途に就くものであります
萬一回漕中に乗損し等の出來せし場合には總代(工夫を總括指揮するもの)等、相寄り修理の上乗下ぐるものにして危険なる事想像に餘りあり
犬山より二人の回漕夫にて四乗を操縦し淺瀬イノコ等の障礙物の間を熟練せる妙手に依り乗下り第二繼立所なる笠松に到り犬山同様の檢閲を受

星 加 正 雄

の注文に依つてである本年の様に四五人も一緒に渡鮮すると云ふことは開校以來始めてであらうこれは即ち朝鮮に於ける林業が盛んになつたからであらうが何を云うても本校は本邦唯一なる林業學校なるを共に其卒業生が技術優秀であるからならうと思ふ

參などは非常に安か先づ生活費は右に述べた様であるから何も心配する必要はない少しく心配せなければならぬのは酒色の方であるこれは餘盛りの若い者には誠に都合のよい誤樂かも知らんが、大なる希望と大なる目的とを以て朝鮮迄發展したからには是非成功だけはして戴かねばならぬ而して立派に成功せんとすれば酒色の道ばかりはよく注意せねばならぬこんな事は僕等の如き若年輩の知つた所ではないが誰も知りつゝ引かれるのは世の常である官廳に勤めて人の信用を得る爲めには是非此の道だけには迷はない様にせなければならぬ此の道にさへ迷はなかつたならば必ず成功せられる僕は斷言しても誤りではないと思ふ

文苑

丸山君に

元吉

丸山兄 ○本誌前號「東京より」は私共に懐しいといふ感じの外に、深い或何物かを感せしめた。直接兄とは文通は爲なかつたが、御卒業後の兄の情況は時々兄から承つた。嘗

て兄から、突如兄が出京せられた事を聞いて、私は蛟龍は到底池中のものでない事を痛感した。 ○是はもう五年も先で、私が名古屋の堀川に居た時の事である、或眞夏の一日、表で人の聲が非常に喧しかつたから何事かと飛び出して見ると、何處から来たか猛烈は勢の旋風が、瓦を飛ばし、石を巻き、棟を壊し、硝子戸を破り、それ等の破片を地に投げつゝ、轟進するのであつた、何れも局部ではあつたが、其の衝に當る物は何物を破壊せずには置かなかつた、斯うして荒しに荒した恐しい旋風は、破片や埃を巻きつゝ堀川の町を離れて高く西の郊外に飛んだ、それは實に見事なものであつた。昔の人が龍と思つたのも無理はない。 ○高層を疾る旋風は實に壯麗で人々からは飛龍とも思はれる、然るにこの雄大なる旋風も、一度其進路を下方に枉げたら、金殿も、玉樓も、神社も、佛堂も、伏屋も、裏長屋も、所有階級のもの等を等しく打ち壊す危険なものと變る、すべての階級を無視する程強く又恐ろしい物はない。

れが下降して下層を縦横に荒れ廻つたならば、道徳も、法律も、威武も、権力も、其進路を遮らんとするものは、打ち毀して進まねば止まぬだらう、嘗て私が見た下層旋風のやうに。 ○私は兄が縦令人間の階級を無視したと言はれても、堅實な兄にはあの下層旋風の憂は無い事を信じて居るが、兎角進路に障害物や誘惑物の多き東京市なれば、それが爲に兄が今行きつゝある進路を枉げられる様な事の無い事を深く祈るものである。 ○兄が役所を捨てて奮然其地に志された事は、少くとも兄を知る者の胸に強い響きを與へた、そして兄の背後には、幾つもの眼が深い感興を以て、今後に於ける兄の奮闘振りを睨んで居る、幸に自重あられよ。

日記の中より

三 年 平田久良治

ありとばかりの風が、枝垂れ柳をゆらゆらと吹き、日はもう餘程西の空に淀んで、菜畝の黄波静かに、あたり飛び交ふ蝶の影も見えなくなつた。墨田川を隔て、遠く霞の裡に聳つて居る筑波山は、空と山と同じ色にまぎれてそれがどうだか、識別がつかなくなつたが、今沈む名残の光に、山の秘密も暴露されて、森や、溪やが分明となつた。それも暫時で、峰を彷徨ふ紫淡き夕雲が見え、からはるれに美しい、薔薇色を呈し、

刻一刻と濃艶の度を増して、あたりの空一面さつと流す臙脂の色鮮かに、せらら床しう流れ行く、小川の水の深碧に映せしも懸て、いつことよりもなく、次第に迫る夜念のためにあせ行きて、夕榮も漸く納まつた。空を仰げば世を掩ひ行く夜の神が御袖を洩れて夜の平和を守るべくや、一點二點三點、次第に見初むる新星の光、彼方品川灣を眺むれば今宵團圓の騰照すべくや、淡々輝く漁村の燈火、さては閃々螢火の如く、波間に瞬く漁火三ツ四ツ實に造化の神筆になれる有形詩篇我が心は早化して仙となつた。靜に耳を澄せば珊瑚として磯邊に寄する連波の鼓、蕭々秘典を奏する磯松の琴、餘韻爛々として消へ行く遠寺の鐘、波にゆられて床しく聞ゆる歎乃の聲、實に天が靈筆を揮へる有聲畫幅、心は再化して神となつた。吾は愛讀せるハネオの詩集を翻きつゝ、竹に出でてどもなく彷徨ふのであつた。折しも節面白く追分節を謳うて行くは歸りを急ぐ馬方であらう、いと静まり返つた夕暮松の木間からもれて、遠く、消ねて行つた

遠足記

今井光風生

古人曰く万巻の書を繙くものは万里の道を行くべしと、味ある哉、言や我々通學生は前川口會長時代より一泊がけ

の探勝遠足初試みんと思ひ居りしがよき機會のなき爲實行し得ざりき。 しかるに今や其の時機到來通學生四十三名の建兒は天下の絶景たる鞍馬方面に一泊の旅行をこころみぬ。 四月二十九日 時はれ花満開の卯月廿九日天麗にして一抹の雲もなく春風颯蕩として遊意切に動き書齋に盤居すべからず我等四十三名は午後一時八澤行人橋集合足を王瀧の天地に向けぬすでにして中畑末に至れば前路忽ち一簇雲の如く霞の如きを見る之を熟視すれば則ち花なりき。 わね度にて二つに別れ大多數は黒澤方面他の一は三尾方面に向ひぬ。 行くことも敷丁にして坂路となるされど健兒の意氣益々奮ひ道といへば道恰も水の涸れたる谷川の如き山道を半里汗たらしく漸く登りつめて顧みればなつかしき我福嶋町はかすみの中につゝまれ清き木曾川は音もなく静々と流れたり。 峠につきぬれば一休せんと思ひしが着きては先のいろがれて下り道に力を得其より一行はひた走りに走り下る下るに從ひ道もよく山あひの所々に畑や田の見えて八寸許にのびたる麥の青々たる心地よし。 我等は既に三里の山路を突破して山間の一村落下殿につきぬ。 此地を貫流する王瀧川を渡船にて渡る青藍

を流せるが如き水、晝けるが如き兩岸の巖心地よし。かくて一行は或は縁滴るばかりの松林の下を出で或は縁圃を眺め木賊小學校につきぬこゝにて當校長は川口君の嚴父にていと親切に優待し呉れぬ午後六時半玉瀧小學校につきぬこの日の行程六里。夜は我校に久しく教鞭をさらし林先生のなにくれとなく御世話下され特に林業に關する御話は嬉しかりき。靈山の麓夢園かにして鶏の鳴く音に目覺むれば。

四月三十日

嗚呼なんたる不幸や軒より落つる雨だれの音に異口同音天の無情をうらみぬ。うらめし顔にて天を仰げば曇りたる空は生活に疲れたる人の眼の如く灰色の雲うれば我等が涙の凝りしには非ざるか。朝飯の用意と雨具の準備にいそがしくせめて十時頃まで待たばと頼みし甲斐もなく雨は益々降りしきれば遂に意を決して出發せり頭に登山笠脊には莫産さて足には草鞋豆も出來やせんされど健兒の面々生温き風を顔に吹かれつゝ「よし」と降りる雨を冒して天下の美林緑樹鬱蒼たる瀬戸川の御料林を過ぎて先登は既に鞍馬の絶景に達しぬ見よ溪流屈曲數丁にわたり断崖屹立幾百尺其上に深緑の天然林の立てるを、樹は青藍の水に映して益々碧く石は清冽の水に洗はれ

て愈々白く、一點の塵埃を留めず秀麗高潔真に比すべきなし吾等は時の移るも知らず此景に見とれしがやがて惜しき別を告げて歸途につく。澤渡時にさしかれば霧深くこめ眺望を妨げ足下の赤土は雨に洗はれてなめらかに歩行頗る困難なりき、ほどなく常盤橋に至る橋下の清潭藍を湛へ橋土の新緑影を翳し爽快を感せしめたり。五時出發雨をついて三尾新道を走るたまたまダイナマイトにて破壊したる岩石道路に横たはり工事の困難なりしを想はしめぬ。行く行く雨を恨みつゝはるかなたを眺むれば黒煙濛々汽笛の聲も勇ましく長蛇の南に去ること速し。河合もさぎ野に來りし頃早や夜のとばりはさがり彼方に點々たる電燈を見る。かくて一行通學會の健兒は一人の落伍者もなく無事愉快に明るき電氣の町に入りしは午後七時なりき。(完)

春雨の後

深々生

春雨の歌んだ午后急に舍外が懐しくなつてふと出た何處とも無く紀念公園の側の道を山の方へ。新緑の若草には暖い日が當つてキラ／＼と輝いて居る桃の花が色褪せて力なげに重々敷く散る檜や赤松や落葉松の木立の隙間

入學後一週間の感

大木多喜雄

やる瀬なき歲月は、山谷の水流の如く、晴るるにつけ曇るにつけ、常に鎖さるゝ私の心にも入學後一週間の日時が深い／＼愁ひの中に終つた。其の間故村のそれは如何ばかり吾心中を往來した事であらう。今筆を持つにあつても、早胸が塞がつて坐るに袖を濕すのである。異域の客それはかばかり故里を思ふの心に沈むものである。仲鷹が三笠山の詩に胸中に鬱積した戀々の情を訴へたのも私の心に

は強い其鳴を起させられるのである。入學してまだ日淺き今日、山河四十里を離れた身には、木曾の鬱蒼たる美林の包擁にも、心を浸する事は出來なかつた。親思ふ心に勝る親心とか、戀々として故郷を思ふ私の心に比して父母の思や、果してどの様であらう。山よりも海よりも言はれた父母の恩に對しては、私は只管に勉強して父母の期待に背かない事である。父母の心に満足と慰安を持たしめる事である。華かな使命を持つた初夏の夕の寮の窓の下に獨り思索に耽る私の耳に、流れ／＼と限りもなう流れて行く黒川の水と、時を求めて鳴く小鳥の聲とが、勉めよ／＼と囁いて居る。(四月二十五日)

寄宿舎あたりの夕暮

白 菊

夕食後、浴場の廊下の側に、無造作に脱ぎすてられたる一足の、薄き薩摩下駄をはき浴場の東から北に折れ、シヤツ、ズボンの白色、黒色、灰色等、數多吊したる乾竿の幾つかの下をぬけ井戸邊を廻りて、一號苗圃に出でぬ、前の擔當農業者の馬鈴薯畑は黒く、扁柏、杉の一年生は緑布を織り其の縦、横に通へる小路は、宛然稿の如し、次の試験苗圃には春が訪はざるか、未、冬の面影を止む。次第に暮れ行く空を眺むれば、青色に沈み

し連山の上に、晚靄一抹、落月に照らされてか、桃花のうれの如く紅に、百花の輿に乗る佐保姫の行列かと思はる、左發電所の二つ三つ見ゆる電燈の光、排水の響右の畑に柔削ぐ木曾女の白き手拭等、皆夢の如し暫く、彷徨ふ中はや夕の帷は下されて、唯白塗の杭三四本、臚に見ゆるのみ、いざ己が室に立ち歸らんと、歩を移せば蛙聲遠く苗代に在りて哈々。(十二室にて)

和歌

春季雜詠

横井正風

春の日の川を流るゝ笹舟に 胡蝶のり行く午下りかな 春風のうよ吹く園に憩ひ居て 友のゆくへを語りけるかな 草摘みて歸る乙女の聲すなり 春日美し夕やけのしして ぶり上げし鎌の光りに驚きて にくる蝶々の愛らしきかな 浅間山灰降る裾野春の日に 肌うそ寒き夕風の吹く 草萌ゆる京にま近き田舎道 おぼろに霞む春の夕ぐれ 夕風の濱邊に立ち打ちよする 波の彼方の君思ふかな 黄昏の風や、寒き春の海

俳句

木曾の偶感

紫蘭洞

徐につきし小驛や春の風 駝蕩の風徐に木曾路かな 木曾若葉芭蕉に駄句のなかりけり 考試終りを谷鶯の啼く音かな 實地講話を檜の下に春の高晴るゝ 青葉一つ流し見し木曾の早瀬かな 水鶏は戸叩く曉の時雨かな 観櫻會にて 紅白の幔幕に花の吹雪かな

雜報

學校記事

○實習終了、四月始よりの實習は廿九日を以て終了せり ○体格検査、四月廿九日二、三學年生徒及び職員一同の体格検査を行へり ○修學旅行、本年度修學旅行は五月十一日出發三學年は北村、新家兩教諭引率關西方面へ二學年は嶋内、宮川兩教諭引率關東方

面へ向へるが三年は十三泊二年は十泊の豫定なり左に宿泊地を記せば

三年 二見、奈良、下市、大瀧、高野口、和歌浦、大阪(二泊)、城ノ崎、宮津、京都(二泊)、名古屋

二年 名古屋、静岡、塔澤、江ノ嶋、東京(三泊)日光、中禪寺、長野

○講堂訓話、右につき五月十日校長は二、三年生を講堂に集め旅行中注意すべき條々につき懇諭する處ありたり

校友會委員任命

校友會各部委員左の通り任命ありたり 庶務部 矢崎清海、小林右内、下島俊二(二年)

辯論部 下平三雄、唐澤繁夫、松尾廣次 伊東厚(二年) 庭球部 三村善三、廣瀬運平(二年) 大木多喜雄(一年) 遠足部 瀧澤銀治郎、井上寛一、伊藤俊夫、古根勳(二年) 雜誌部 小田實、山下不二三、伊藤幾太

郎(以上三年)小澤安親、星加正雄、西尾彰、横井正守、島田徳之助、伊藤芳郎、(以上二年)鷹見勳、宮澤末雄、井原邦雄、青木忠太、佐藤誠一、喜多村勇(以上一年)

擊劍部 内田新之助、今井忠雄(以上二年) 伊東近良、吉澤豊一(以上一年) 弓術部 内山伊那登、今井徹郎、細窪友一郎(以上二年)

辯論會便り

新緑の裡に残紅を含み老鶯の嬌音亦溪間に名残を留めて蒼仙未だ西山に立てり。 皇月初めの六日我が校友會は新入會員歡迎會を開催しぬ。紅白の幔幕は緩く和風に流れ新調の演壇は天晴れ辯士の登壇を待ち顔なり。劈頭第一七宮會長登壇し開會を宣するや續いて今日の花形辯士は右より左より絡驛として壇上に立ち各がし得意の廣長舌を振ひたるが殊に新會員の活動振りは多大の喝采と興味とを以て迎へられぬ。 左に當日辯士の芳名を連ね益々諸兄の奮勵を希望す。 開會之辭 七宮會長 辯論の必要 三年 平田久良治君

自己の力 二年 下平三雄君 忍耐 一年 佐藤誠一君 偶感 一年 大木多喜雄君 寓話 一年 伊藤近良君 信仰 三年 岩田元吉君 目前に存する大和魂 一年 鷹見勳君 成功 二年 唐澤繁夫君 入學雜感 一年 宮澤末雄君 零落の墳墓 二年 今井徹郎君 日本の特長 三年 古畑今朝茂君 偶感 三年 鈴木繁君 偶感 一年 玉瀬孝三君 成功 二年 梶田實治君 國債に就て 一年 米久保春雄君 偶感 一年 井上寛一君 偶感 一年 青木忠太君 偶感 同代 田實君 辯論會所感と希望 北村願 問 Meaning of The Life 三年 長坂清人君 終りに臨み一言を追記す。辯論の消長は我校友會の意氣に關す益々努めて倦むこと勿れ」と。拾貳時に垂んとして會は閉ざされぬ胡蝶二つ靜に團上を戯れて春の日は長閑なり。(東洲記す)

觀櫻會の記

横井正風

蘇峽の天地にも春は漲りて琴平の山の櫻花爛漫と咲き綻びたるに機逸すべからずとて我校友會遠足部は四月廿六日午後より琴平山土に紅白の幔幕張り廻し觀櫻會を催しぬ 原遠足部長の開會の挨拶終れば各自の前に配られたる審司、林檎、密柑に舌鼓をうちかねて定められたる實習各組より選出せる代議士の餘興に入る中にも殊に興を引けるは新入生佐塚甲子君の手品其のスタイル口上の巧みなる事見る者聞く者をして失禮乍ら君の前身は手品師かとも疑はしめぬ、次は二年級大久保猪三郎君外三名の浦島太郎の歌これ又非常なる興をもつてむかへられたり次は三年級岩田元吉君の詩吟玲瓏たる音聲は君の天賦の美しい情緒の流れ出づる響にてありし其他の餘興いづれも拍手喝采のうちに終り且つ二百の健兒の肺肝より絞り出されたる校歌及前後の高聲聲裡に午後四時閉會の幕は下りぬ、いつしか日の女神は還幸の御車を早めたまひつ西も空一帯に棚引く雲の紅紫黄藍はては樺色など配合美しく彩りて幾條とも數知れざる悲愴なるそ

會員消息

が最後の光線はとぎれ／＼の雲面より青黒き木曾川の水に放たれぬ(當日記す) 帝國林野管理局林務講習の爲上京せられし本校出身者は前號所報の外、市岡淳一郎君、木村康明君、松本清太君都合七名にて全員は二十四名なりといふ 岩瀬幸吉君は今回静岡縣林業手を命せられ内務部山林課に勤務の事となれり 恩田司馬之助君は岐阜縣船津小林區署に轉任 關琴義君、五月一日より七月三十日迄水戸工兵第十四大隊に演習の爲召集せられたり 下枝壽一君、昨年森林主事に任せられ福嶋縣南會津郡山口小林區署へ轉勤 中村五郎君、今回一身上の都合により秋田大林區署を辭し故山に歸省せらる 先般秋田大林區署に於ける森林主事講習を受けたる嶋田勘四郎東原智兩君は成績優秀にて夫々首席次席を占められたる由中村君の通信に見えたり 山下藤一君、肥後國球磨郡一勝地製材所に轉任 最近、公務出張の序を以て母校を訪問せ

本年度卒業生就職地

られたるは松澤莊太郎君、兒野榮君、仲俣伍郎君、服部啓次郎君 長野縣小林區署 丸山嘉一郎君 秋田縣大館小林區署 加藤源一郎君 大阪大林區署 宮川昌平君 同上 宮下武夫君 同上龜山小林區署 澤田富可君 鳥取小林區署(前號取消) 森次潔君 朽木縣今市小林區署 今井武雄君 長野小林區署 今井 欽君 群馬縣中之條小林區署 樋口 勵君 福島縣棚倉小林區署 岡西 猛君 新潟縣新發田小林區署、

朽木縣太田原小林區署 千田政美君

小原靜雄君

福島縣喜多方小林區署

平田美則君

山梨縣恩賜縣有財產管理課

矢島武六君

樺太廳林務課

野本興一君

同 上

原正造君

本縣南佐久郡北牧村林業技術員

熊谷清逸君

林支代前納者氏名

一金壹圓五拾錢

喜多村弘君

加茂憲太郎君

加藤源一郎君

古畑秋藏君

今井武雄君

竹村節三君

川口勇二郎君

千村彌之助君

福澤定雄君

澤田富可君

同 上 野本興一君

同 上 平田實君

同 上 奧村利一君

同 上 今井欽君

同 上 千田政美君

同 上 梅村計介君

同 上 山崎兵平君

同 上 小池茂樹君

同 上 柘植五郎君

同 上 長谷部久雄君

同 上 宮川昌平君

同 上 大澤國男君

同 上 有賀正一君

同 上 宮下孝美君

同 上 佐々木久一君

同 上 矢島武六君

同 上 坂本光太郎君

同 上 下平佐門君

同 上 鳴澤義男君

同 上 岡西猛君

同 上 樋口勵君

同 上 小松良輔君

同 上 等之力與八君

同 上 市岡正茂君

同 上 原正造君

同 上 平田美則君

同 上 久保田邦治君

同 上 熊谷清逸君

同 上 九山嘉一郎君

同 上 中畑佐耕君

同 上 森下義郎君

同 上 開運隆飛登君

同 上 中川源太君

同 上 小原靜雄君

同 上 森次潔君

大正五年五月廿三日印刷
大正五年五月廿五日發行

長野縣四筑摩郡福島町四〇四番地
編纂兼發行人 安井正夫

長野市四後町丙二十一番地
印刷者 田中彌助

長野市四後町乙二十一番地
印刷所 長野新聞社活版部

長野縣四筑摩郡福島町二八九番地
發行所 蘆澤書店